### 第1週間 水曜日



### 早課

### 第 19 カフィズマ

第1段 第134、<del>135</del>聖詠

しゅなりほうあっしゅしょぼくしゅいえかかみいえにかったものによったしゅとの名を讃め揚げよ、主の諸僕、主の家、我が神の家の庭に立つ者よ、讃め揚げよ。主を ほ b しゅ じんじ そのな うた こ たの けだししゅ おのれ ため 讃め揚げよ、主は仁慈なればなり、其名に歌へ、是れ樂しければなり。 蓋 主は 己 の爲にイ もっともたか し しゅ およ ほつ ところ てん ち うみ ことごと ふち おこな くも ちより 最 高きを知れり。主は凡そ欲する 所 を天に地に海に 悉 くの淵に 行 ふ、雲を地 はて お いなずま あめ うち つく かぜ そのくら いだ かれ しょし うの極より起こし、電を雨の中に作り、風を其庫より出す。彼はエギペトの初子を撃ちて、 ひと かちく およ かれ なんじ うち おい きゅうちょうきせき およ その人より家畜に及べり。エギペトよ、彼は爾の中に於て 休徴 奇迹をファラオン及び其 ことごと ぼく うえ つかわ かれ おお たみ う ゆうりょく おう ほろぼ すなわち 悉 くの僕の上に 遣 せり。彼は多くの民を撃ち、 有力 の王を 滅 せり、 即 アモレイ  $f_{x,y}$  しゅ なんじ な なが あ しゅ なんじ きおく よよ あ けだし イズライリの 業 となせり。主よ、 爾 の名は永く在り、主よ、 爾 の記憶は世世に在り。 蓋 しゅ そのたみ しんぱん そのしょぼく あわれみ たいほう ぐうぞう すなわちぎん すなわちきん ひと て主は其民を審判し、其諸僕に 憐を垂れん。異邦の偶像は乃銀、乃銀、乃金、人の手 ゎざ かれらくち い め み みみ き そのくち いき これ つく の造工なり。彼等口ありて言はず、目ありて見ず、耳ありて聽かず、其口に呼吸なし。之を造 もの およ これ やの もの これ あいに いえ しゅ あが ほ いえる者と凡そ之を恃む者とは是と相似ん。イズライリの家よ、主を崇め讃めよ。アアロンの家 しゅ あが ほ いえ しゅ あが ほ しゅ おそ もの しゅ あが ほよ、主を崇め讃めよ。レワィの家よ、主を崇め讃めよ。主を畏るる者よ、主を崇め讃めよ。 いま しゅ あが ほ イエルサリムに在す主はシオンに崇め讃めらる。「アリルイヤ」。 <145 聖詠省略> 光栄は父と子と聖神に帰す。 誦経

(詠) 今も何時も世世に、「アミン」 アリルイヤ、アリルイヤ、アリルイヤ、神よ、光栄は爾に帰す。(三次) 主憐めよ。(三次)光栄は父と子と聖神。に帰す。



**誦経** 今も何時も世々に、「アミン」。

第2段 第137-139-聖詠

われこころ つく なんじ きんえい しょてんし まえ おい なんじ うた けだしわ くち ことば なんじ 我 心 を 盡して 爾 を 讃榮 し、諸天使の前に於て 爾 に 歌 ふ、 蓋 我が 口の 言 は 爾 ことごと これ き われなんじ せいでん まえ こうはい なんじ あわれみ なんじ しんじっ ため なんじ 悉 く之を聽けり。我 爾 が 聖殿 の前に 叩拜 し、爾 の 憐 と 爾 が 真實 の為に 爾 の な きんえい けだしなんじ なんじ ことば こうだい 名を 讃榮 す、 蓋 爾 は 爾 の 言 を 廣大 にして、 諸 の 爾 の名に逾えしめたり。我が呼び ひ なんじわれ き わ たましい いさ し日、 爾 我に聽き、我が 靈 を勇ませたり。主よ、地の諸王 爾 が 口の言を聽かん時、みななんじ さんえい しゅ みち うた けだししゅ こうえい おおい しゅ たか くち ことば き かんなんじ さんえい しゅ みち うた けだししゅ こうえい おおい の 主 は高くして、 謙 る者 を見、誇る者を 遙 に識る。我若し 艱難 の中に行かば、爾 我を生かし、爾 の手を伸べて我が でき いかり おき 盗 に識る。我若し 艱難 の中に行かば、爾 我を生かし、爾 の手を伸べて我が でき いかり おき 本んじ みぎ て われ すく はん ことは我に代りて 行 はん、主よ、 爾 の 響 は世世にあり、 爾 の手の造りし者を棄つる 母れ。

誦経 光栄は父と子と聖神に帰す。



**誦経** 今も何時も世々に、「アミン」。

#### 第3段 (第<del>140、141、</del>142 聖詠)

しゅ わ いのり き なんじ しんじつ よ わ ねがい みみ かたぶ なんじ ぎ よ われ 主よ、我が 祷を聆き、爾の真實に依りて我が願に耳を傾けよ、爾の義に依りて我に き たま なんじ ぼく うったえ な なか けだしおよ いのち もの いつ なんじ まえ ぎ 聽き給え。爾の僕と 訟 を爲す毋れ、蓋 凡そ生命ある者は、一も爾の前に義とせら てき わ たましい お わ いのち ち ふみにじ われ ひさ し もの ごと くらき れざらん。敵は我が 靈 を逐ひ、我が生命を地に 蹂 り、我を久しく死せし者の如く 暗 に お たましい われ うち もだ わ われ うち むな ごと われいにしえ ひ おも 居らしむ、我が 靈 は我の衷に悶え、我が心は我の衷に曠しきが如し。我 古 の日を想 およ  $x_{AU}$  おこな  $x_{AU}$  て わざ はか わ て の  $x_{AU}$  むか わ ひ、凡 そ 爾 の 行 ひしことを 考  $x_{AU}$  爾 が手の工作を計る。我が手を伸べて 爾 に向 ひ、我が ましい かわ ち ごと なんじ した しゅ すみやか われ き たま わ たましい おとろ 靈 は渇ける地の如く 爾 を慕ふ。主よ、 速 に我に聽き給へ、我が 靈 は 衰 へたり、  $x_{\lambda}$  で かんばせ われ かく  $x_{\lambda}$  しか われ はか い もの ごと われ つと  $x_{\lambda}$  で 爾 の 顔 を我に隠す毋れ、然らずば我は墓に入る者の如くならん。我に夙に 爾 の なんじ あ しゅ われ わ てき すく たま われなんじ はし っ われ なんじ むねを 爾 に擧ぐればなり。主よ、我を我が敵より救ひ給へ、我 爾 に趨り附く。我に 爾 の旨 おこな おし たま なんじ われ かみ ねが なんじ ぜん しん われ ぎ ちを 行 ふを 教へ給へ、 爾 は我の神なればなり、願はくは 爾 の善なる神は我を義の地に ゅちび しゅ なんじ な よ われ い たま なんじ ぎ よ わ たましい くなん ひ 導 かん。主よ、爾の名に依りて我を生かし給へ、爾の義に依りて我が 靈 を苦難より引 いだ たま なんじ あわれみ もっ わ てき ほろぼ およ わ たましい せ もの たいら たまき出し給へ、爾の 憐 を以て我が敵を滅し、凡そ我が 靈 を攻むる者を夷げ給へ、 われ なんじ ぼく 我は爾の僕なればなり。

こうえい ちち こ せいしん き いま いつ よよ 光榮 は父と子と 聖神 に歸す。今も何時も世世に、「アミン」。

かみ こうえい なんじ き 「アリルイヤ」「アリルイヤ」、神よ、光榮は爾に歸す。三次

<続けて誦経>

斎1

【坐誦讃詞】 第二の調。

ひと あい しゅ なんじ くるしみ もっ しゅう くるしみ あた もの なんじ じゅうじか もっ 人を愛する主、爾の苦を以て衆に苦なきを與へし者よ、爾の十字架を以て

b にくたい しょよく ころ われものいみ もっ なんじ こうえい えき もの しんせい くるしみ み我が 肉體 の 諸慾 を殺して、我 齋 を以て 爾 の 光榮 に役する者を 神聖 なる 苦 を見た もの な たま われゆたか おおい あわれみ え ためるに堪ふる者と爲し給へ、我 豊 に 大 なる 憐を 獲ん爲なり。

こうえい ちち こ せいしん き いま いつ よよ 光榮 は父と子と 聖神 に歸す。 今も何時も世世に、「アミン」。

十字架生神女讃詞、同調。

ハリストスよ、 童貞女 及び 爾 の母は 爾 が木に懸けられて死ししたるを見て、痛く哭き で云へり、吾が子よ、此の畏るべき秘密は 何ぞ、 衆 人に 永遠 の生命を 賜ふ者 は如何ぞ しゅうじゅうじゅうじゅうじか し自由にして恥づべき死を以て十字架に死する。

<戻る。枠 P12、 50 聖詠>

# **斎2**【三歌經の規程】第二の調。

第三歌頌、 聖アンナの歌句、列王記第一巻二章一至十節

たか こころ しゅ よ よろこ わ つの わ かみ よ たか わ くち わ てき 右誦經句、我が 心 は主に縁りて 喜 び、我が角は我が神に縁りて高くなり、我が口は我が敵 うぇ ひら けだしわれ なんじ すくい ため たのし の上に開けたり、 蓋 我は 爾 の 救 の爲に 樂 む。

しゅ ごと せい もの けだしなんじ ほか た もの わ かみ ごと けんご もの 左誦經句、主の如く聖なる者あらず、蓋 爾 の外に他の者なし、我が神の如く堅固なる者あらず。

おご ことば い なか きょうぼう なんじ くち い なか なか 右 句、驕れる 言 を言ふ勿れ、 狂妄 をして 爾 の口より出でしむる勿れ。

けだししゅ えいち かみ わざ かれ はか 左 句、蓋 主は睿智の神にして、行爲は彼に權られたり。

かれ そのせいしゃ あし まも ふほう もの くらやみ うち き 右 句、彼は其聖者の足を守る、不法の者は幽暗の中に消ゆ。

われらせっせい もっ しる ごと したい じゅうじか てい きとう うち けいせい くるしみ 左讃詞、我等 節制 を以て、録 されしが如く、肢體を十字架に釘し、祈祷の中に 儆醒 し、 苦 う しょよく ころ もの あと したが いのち わた を受けて 諸慾 を殺しし者の後に 從 ひて 生 を度らん。

ちしゃ そのち もつ ほこ なか つよ もの そのちから もつ ほこ なか と もの そのとみ 右 句、智者は其智を以て誇る勿れ、強き者は其 力 を以て誇る勿れ、富む者は其 富をもつ ほこ なか 以て誇る勿れ。

つみ しゅうかん な われ えいきゅう ほろび ひ しか なんじじれんふか しゅ なんじ 左讃詞、罪は 習慣 と爲りて我を 永久 の滅亡に引く、然れども 爾 慈憐深き主よ、爾 のじゅうじか もっ われ これ まぬが たま 十字架を以て我を是より 免 れしめ給へ。

たたかうもの どれい まぬが たま 電闘者 の奴隷より 免 れしめ給  $\sim$ 。

しゅ てん のぼ とどろ かれ ぎ ち はて しんぱん 右 句、主は天に升りて 轟 けり、彼は義にして地の極を審判せん。

じゅうじか き せかい ため せっせい はな ひら われらねっしん これ した 左讃詞、十字架の木は世界の爲に節制の花を開けり、我等 熱心に之を慕ひて、ハリストス しんせい いましめ けっか たのしの 神聖 なる 誠 の結果を 樂 まん。

かれ ちから もっ そのおう たま そのあぶら もの つの たか 右 句、彼は 力 を以て其王に賜ひ、其 膏 つけられし者の角を高くせん。

われらみないましょよく せっせい たも しゅ ため にくたい じゅうじか てい そのおもい しんせい 左讃詞、我等皆 今 諸慾 の 節制 を 有 ちて、主 の 爲 に 肉體 を 十字架 に 釘 し、其 念 が 神聖 いのち ため し あらわ なる生命の 爲 に死したるを 顯 さん。

こうえい ちち こ せいしん き 右 句、光榮 は父と子と 聖神 に歸す。

聖三者讃詞、

われゆいいち すがた さんい ちち こ せいしん しんせい ゆいいち けんぺい ばんゆう くにおよ こうみょう 我 惟一 の 像 の三位、父、子、聖神 、神性 の 惟一 の 權柄 、萬有 の 國 及 び 光明

を讃榮す。

nt no よよ 右 句、今も何時も世世に、「アミン」。

生神女讃詞、

われら かみ こうえい なんじ き こうえい なんじ き 右 句、 我等の神よ、光榮は爾に歸す、光榮は爾に歸す。

(詠)[イルモス]木を以て罪を殺しし主よ、我等を爾の中に堅めて、爾を畏るる畏を我等爾を歌う 者の心に植え給え。



#### 【小連祷】

我等復又安和にして主に祷らん。

(詠) 主憐めよ

神よ、爾の恩寵を以て我等を佑け救ひ憐み護れよ。

(詠) 主憐めよ

至聖至潔にして至りて讃美たる我等の光榮の女宰・生神女・永貞童女マリヤと、諸聖人とを記憶して、我等 己の身及び互に各の身を以て、并に悉くの我等の生命を以て、ハリストス神に委託せん(詠) **主爾に** 司祭高聲 蓋權柄及び國と權能と光榮は爾父と子と聖神に歸す、今も何時も世世に(詠)「アミン」



第八歌頌、三少者の歌句、ダニイル三章五十七至八十八節

しゅ ことごと ぞうぶつ しゅ あが ほ かれ うた よよ ほ あ 右誦經句 主の 悉 くの 造物 は主を崇め讃めよ、彼を歌ひて世世に讃め揚げよ。

しゅ しょてんし しゅ しょてん しゅ あが ほ かれ うた よよ ほ あ 左誦經句 主の諸天使、主の諸天は主を崇め讃めよ、彼を歌ひて世世に讃め揚げよ。

しょてん うえ あ みず しゅ ばんぐん しゅ あが ほ かれ うた よよ ほ あ 右 句 諸天の上に在る水、主の萬軍は主を崇め讃めよ、彼を歌ひて世世に讃め揚げよ。

ひ つき てん ほし しゅ あが ほ かれ うた よよ ほ あ 左 句 日と月と、天の星は主を崇め讃めよ、彼を歌ひて世世に讃め揚げよ。

た讃詞、諸慾 の 爐 は我 の 靈 を燃 す、然れども 爾 大 なる 寛容 に因りて十字架 に なんじ ふきゅう かき むよく ながれ いだ おんしゃ なんじ じれん つゆ もっ 釘せ らられて、爾 の 不朽 なる 脇より無慾 の 流 を 出し し 恩者 よ、爾 が慈憐の露 を以 これ け たま て之 を滅し給 へ。

左讃詞、ハリストスよ、爾は己が十字架に擧げらるるを以て、我等惡に陷りたる者を擧 ゆえ われつみ ふち つまづ もの のぼ すくい いし かた たま わ なんじ けんぺいげたり。故に我罪の淵に躓きし者を登せて、救の石に堅め給へ、我が爾の權柄を さんえい ため 讃榮 せん爲なり。

しゅ しさいら しゅ しょぼく しゅ あが ほ かれ うた よよ ほ あ 右 句 主の司祭等、主の諸僕は主を崇め讃めよ、彼を歌ひて世世に讃め揚げよ。

左讃詞、ハリストスよ、 爾 の 戈 にて我が 心 より 諸慾 の 膿 を 浄め 、蛇 が 其 毒 の歯にて齧 や ぜんたい いや やれ つまづき なんじ しんせい みち ゆ たまみたる我が 全體 を 醫し て、我 に 躓 なく 爾 の 神聖 なる 道 を行かしめ給へ。

しょしん しょせいじん たましい しょぎじん こころ けんぴ もの しゅ あが ほ かれ うた 右 句 諸神 と 諸聖人 の 靈 と、諸義人 と 心 の謙卑なる者と主を崇め讃めよ、彼を歌 ひて世世に讃め揚げよ。

た生神女讃詞、無玷の者よ、我等 爾 を 光り たる 燈 及び 燭台 として 尊 む、 蓋 神性 の ひ なんじ うち お よ ふはい かこ 大は 爾 の中に居りて、夜の腐敗に 園ま れたる者を照らせり。讃美たる者よ、我等皆 爾 の産 を讃め揚ぐる。

右 句 アナニヤ、アザリヤ、ミサイルは主を崇め讃めよ、彼を歌ひて世世に讃め揚げよ。
とうぞく あいだ き か にはこ もっ いのち なが わき さ もの とうと うた を讃詞、盗賊の間に木に懸けられ、戈を以て生命を流す脇に刺されたる者を 尊 み歌ひ、 は あ は はんせい あが ほ 讃め揚げて、萬世に崇め讃めよ。

われらしゅ ちち こ せいしん あが ほ 右 句、我等主なる父と子と 聖神 とを崇め讃めん。

聖三者讃詞、

いま いっ よよ 右 句、今も何時も世世に、「アミン」。

生神女讃詞、

われら かみ こうえい なんじ き こうえい なんじ き 右 句、我等の神よ、光榮は爾に歸す、光榮は爾に歸す。

(詠) 我等主を讚め、崇め、伏し拝みて、世世に歌い讚めん。

[त्र्राम्य]昔シナイ山に於て棘の中にモイセイに童貞女の奇跡を預め示しし者を尊み歌い、 崇め讚めて、万世に讚め揚げよ。



司祭 生神女光の母を讃歌を以て讃め揚げん。

### (詠) [ヘルビムの歌]

我が心は主を崇め、我が靈は神我が救主を悦ぶ。

| ペルビムより<u>尊く</u>、セラフィムに並びなく<u>栄え</u>、貨操を破らずして神言を<u>生みし</u>、実の生神女たる爾を<u>崇め讃む</u>。



第2句 その婢の卑しきを顧み<u>給へり</u>、今より萬世我を福なり<u>と言はん</u>、→ヘルビムより尊く

第3句 権能を持ち給へるものは、我が為に大なる事を為せり、其の名は聖なり、其の憐れみは

世世 彼を畏るる者に臨まん

→ヘルビムより尊く

第4句 其の肘の力を表して、心の驕れるものを散らし給へり、

→ヘルビムより尊く

第5句 権ある者を位より斥け、卑しき者を上げ、飢うる者を善に飽かせ、富める者をむなしく帰らせ給へり。 →ヘルビムより尊く

第6句 其の僕、イズライリを納れて、我が先祖に告げしが<u>如く</u>、アウラアムと其の裔を世世に 憐れむ事を記憶し給へり、 →ヘルビムより尊く

第九歌頌 聖ザハリヤの歌句、ルカ六十八至七十九節

しゅくさん かな しゅ かみ けだしそのたみ かえり これ あがない な 右誦經句 祝讃 せらるる哉、主イズライリの神、蓋 其民を眷みて、之に 贖 を爲し、

われら ため すくい つの そのぼく いえ おこ 左誦經句 我等の爲に 救 の角を其 僕ダワイドの家に興せり、

こせい そのせい よげんしゃ くち もつ い ごと 右 句 古世より 其 聖 なる 預言者 の 口 を 以 て言ひしが 如 し、

すなわちわれら わ しょてきおよ およ われら にく もの て すく 左 句 即 我等を我が諸敵及び凡そ我等を悪む者の手より救ひ、

かがや い ものいみ こうめい おんちょう ひ あきらか しゅうじん じゅうじか こうせん 左讃調、輝 き出でたる 齋 、光明 なる 恩寵 は、日よりも 明 に 衆人 に十字架の 光線、とうと くるしみ あかつき およ ふっかつ すくい ひ ふくいん 尊 き 苦 の 曉 、及び復活の 救の日を福音 す。

右 句 謂ふ、我等に我が 諸敵 の手より 救 はれし後、 懼 なく、彼の前に在りて、聖を以て ぎ もつ しょうがいかれ つか 義を以て、生涯 彼に事へしめんと。

た讃詞、我等 潔浄 を愛し、淫を離れ、貞潔 を以て腰を束ねん、 潔 き者として 獨 しゅうじん けつじょう もと わ たましい いさぎょ きゅうせいしゅ まえ あらわ ため 衆人 より 潔浄 を求むる我が 靈 の 潔 き 救世主 の前に 顯 れん爲なり。

こ なんじ しじょうしゃ よげんしゃ とな けだししゅ めんぜん ゆ そのみち そな 右 句 子よ、爾 も 至上者 の 預言者 と 稱 へられん、 蓋 主 の 面前 に行きて、其 道 を 備 へん。

つみ じゅうじか てい しゅさい わ にくたい なんじ おそ おそれ 左讃詞、アダムの罪を十字架に 釘せ しハリストス・主宰よ、我が 肉體を爾を畏るる畏に

くぎ たま わ しょあく ほだし と なんじ ほこ もっ きょうあくしゃ や お われ そのがい 釘うち給へ、我が諸惡 の 絆 を解き、爾 の戈を以て 兇惡者 の矢を折りて、我に其 害  $^{tab}$  たま より 免 れしめ給へ。

右 句 彼の民に、其 救 は 即 諸罪の 赦 にして、我が神の 矜恤 に因ることを知らしめん。

左生神女讃詞、至りて義なる 審判者、及び 獨 和 げ易きハリストス・主を生みし 童貞 小女

おれ しんぱんおよ ひ くるしみ つみ いつらく われ ため そな もの のが たまよ、我を審判 及び火と 苦 と、罪の逸樂が我の爲に備へし者より脱れしめ給へ。

右 句 此の 矜恤 に因りて、東旭は上より我等に臨めり。

くらやみ し かげ ざ もの てら われら あし へいあん みち むか ため 右 句 幽暗と死の蔭とに坐する者を照し、我等の足を平安の道に向はしめん爲なり。

た讃詞、ハリストスよ、我等人人皆十字架と葦と釘と戈、及び爾が生命を施す 苦 なるしみ を讃詞、ハリストスよ、我等人人皆十字架と葦と釘と戈、及び爾が生命を施す 苦 なくはい うた もっ なんじ ほ うた に伏拜して、歌を以て爾を讃め歌ふ。

こうえい ちち こ せいしん き 右句、光榮 は父と子と 聖神 に歸す、

聖三者讃詞、

- まんい
   ゆいいちしゅさい
   ゆいいち
   さんしゃ
   どうえい
   しんせい
   ちち
   こ
   およ
   せいしん

   こ
   三位なる 惟一 者、主宰 たる 惟一 の 三者、同 榮 なる 神性、父、子、及び 聖神

   おれらしゅうじん すく たま
   よ、我等 衆人 を 救ひ 給へ。
- れま いっ よよ 右 句、今も何時も世世に、「アミン」。

生神女讃詞、

- た、 しょうしんじょ せかい きょめ もの よろこ われらつみ ものみなこれ はし っ つね 生神女 、世界の潔浄たる者よ、 慶 べ、我等罪なる者皆之に趨り附きて、常にかみ わぼく う 神に和睦するを得るなり。
- われら かみ こうえい なんじ き こうえい なんじ き 右 句、我等の神よ、光榮は爾に歸す、光榮は爾に歸す。

じんじ しゅ なんじ じゅうじか われ かた われ ものいみ いっしゅうき いさ 左讃詞、仁慈なる主よ、爾の十字架にて我をも固めて、我に、 齋 の 一周期 を勇ましく お たま 終へしめ給へ。

むてん (詠) [イルモス]我等信者は皆潔浄無玷なる母童貞女を生神女として歌を以て敬虔に崇め讚む。



<戻る。枠の P15「常に福」へ>

# 斎3

#### くづけ スティヒラ 【挿句の 讃頌 】

また x の

ねが しゅわ かみ めぐみ われら あ ねが わ て わざ われら たす たま 願はくは主吾が神の恵は我等に在らん、願はくは我が手の工作を我等に助け給へ、 句) って ゎざ たす たま 我が手の工作を助け給へ。

致命者讃詞、

か ちめいしゃ なんじら じゅうじか ちから いざない か えいえん いのち ハリストスの勝たれぬ致命者よ、 爾等 は十字架の 力 にて 誘惑 に勝ちて、 永遠 の生命の おんちょう う はくがいしゃ おどし おそ くるしめ もっ きず なんじらたのし いま 恩寵 を受けたり。 迫害者 の恐嚇を畏れず、苛虐 を以て傷つけらて、爾等 樂 めり、今  $x_{0}$  なんじら ち われら たましい いやし な われら たましい すく いの たま 爾等 の血は我等の 靈 の 醫 と爲れり、我等の 靈 の 救は れんことを祈り給へ。

こうえい ちち こ せいしん き いま いつ よよ 光榮 は父と子と 聖神 に歸す、今も何時も世世に、「アミン」。

十字架生神女讃詞、同調、

ああ しゅさい わ め み ところ あらわれ こ なん ばんぶつ たも もの き あ しゅう 鳴呼 主宰 よ、我が目に見る 所 の 顯現 は是れ 何ぞ や、萬物 を保 つ者 は木に擧げられ、衆 いのち たま もの ころ いた いさぎょ しょうしんじょ い がた かれ ひか い に生命を賜ふ者は殺されたりと、至りて 潔 き 生神女 は言ひ難く彼より光り出でた かみびと じゅうじか み な いる神人を十字架に見て、泣きて言へり、

<→戻る。枠 P19「至上者よ」へ>

### 六時課

**斎4**【預言のトロパリ】第四の調。

誦経

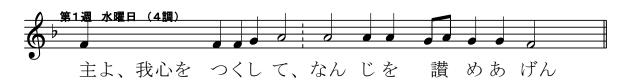
ひと あい しゅ なんじ われら なに つく し われら よわ し われらつみ おか 人を愛する主よ、爾は我等が何より造られしを知り、我等の弱きを知る。我等罪を犯し b かみ なんじ はな わ て た かみ の じんじ しゅ なんじ じれん たれども、神よ、爾を離れず、我が手を他の神に伸べざりき。仁慈の主よ、爾の慈憐を もったわれらなだがまり、以て我等を宥め給へ。

司祭 謹みて聽くべし。

誦經 提綱 、 第四の調。 第九聖詠

しゅ われこころ つく なんじ ほ ぁ 主よ、我 心 を盡して 爾 を讃め揚げん。

<sup>われなんじ ため よろこ いわ</sup>句) 我爾の爲に慶び祝はん。



司祭 睿智。

はげんしょ よみ 誦經 イサイヤの預言書の讀 2章3至11節

司祭 謹みて聽くべし。

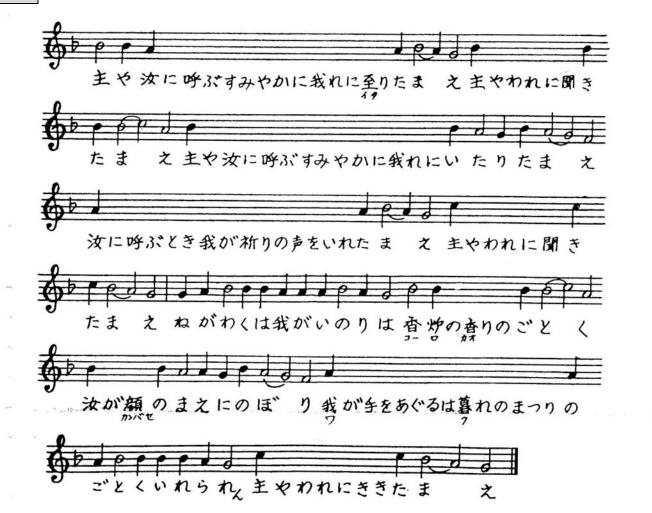
誦經

というという。 また はいっという いっという ことに は は イエルサリムより出でん。主は 諸民 を 審判 し、 多くの 民族 を 責めん、 彼等は其 剣 を 鍛ちかへて 犂 と 為し、 其 矛 を 鍛ちかへ で 鎌 と 為さん、 民は民に向いて 剣 を 擧げず、復 戦 の事を 學ばざらん。 鳴呼イアコフ の家よ、 來れ、 我等主の 光 の 中を行かん。 然れども 爾は 爾の民たるイアコフの家を 東てたり、 蓋 彼等は多くの事を 東より習 へり、 下筮者 の彼等の中にあること、フィリスティヤ人に於けるが如し、彼等は異邦の諸子に 與 す。 其地には 金銀 充ちて、 其財實無數なり、 其地には 馬 充ちて、 其財實無數なり、 其地には 偶像 充ちて、 彼等は 其手の工、 其指の作り し者を 拜む。 人は卑くなり、 尊 き者は賤しくなれり、 爾 彼等を 赦さざらん。 きを かん なり、 其威厳の 光榮を避けて、 巖に入り、土に匿れよ。 彼の日、 人の驕れる目は降され、 人の高きは卑くせられ、 獨 主のみ高く 擧らん。

<→枠へ戻る P36>

## 晩 課

## **斎 5** 【主よ、爾によぶと 讃頌 】



お こえ もってしゅ よ お できれい なが 摩を以て主に祷り、我が 祷 を其前に注ぎ、我が 憂 を其 我が 摩を以て主に籲び、我が摩を以て主に祷り、我が 祷 を其前に注ぎ、我が 憂 を其 まえ あらわ お たましいわれ うち よわ しきき なんじ われ みち し か ゆ みち おい て、 かれら ひそか わ ため あみ もう けたり。我 右に目を注ぐに、一人も我を認むる者なし、我 に我が爲に網を設けたり。我 右に目を注ぐに、一人も我を認むる者なし、我 に 遁るる 所 なく、我が 靈 を 顧 る者なし。主よ、我 爾 に呼びて云へり、 爾 は我の かくれが なり、生ける者の地に於て我の分なり。我が籲ぶを聽き給へ、我 甚 弱りたればな

り、我を迫害する者より救ひ給へ、彼等は我より強ければなり。<中略>  $^{bh}$  はくがい もの すく たま かれら われ つよ 
な 迫害する者より救ひ給へ、彼等は我より強ければなり。<中略>  $^{bh}$  たましい ひとや ひ いだ われ なんじ な さんえい たま 
我が 靈 を獄より引き出して、我に爾の名を讃樂せしめ給へ。

【三歌経のスティヒラ】

カ たましい ひとや ひ いだ われ なんじ な さんえい たま句) 我が 靈 を 獄 より引き出して、我に 爾 の名を 讃榮 せしめ給へ。

<sup>じちょう スティヒラ うた</sup> 嗣ぎて自調<sup>1</sup>の 讃頌 を歌ふ、 第八の調

なんじおん われ たま とき ぎじん われ めぐ 句) 爾 恩を我に賜はん時、義人は我を環らん。

けいてい にくたい ものいみ たましい ものいみ およそ ふぎ むすぼおれ と きょうはく 兄弟 よ、肉體 にて 齋 し、 靈 にても 齋 せん。凡 の不義の 結 を解き、強迫 の  $^{hb}$  な な  $^{hb}$   $^{hb}$  な  $^{hb}$   $^{hb}$  な  $^{hb}$   $^{hb}$   $^{hb}$   $^{hb}$   $^{hb}$   $^{hb}$   $^{hb}$ 

致命者讃詞 第一の調

しゅ われふか ところ なんじ よ しゅ わ こえ き たま 句) 主よ、我深き 處 より 爾 に呼ぶ。主よ、我が聲を聽き給へ。

いか そんえい いか きんよう せいじん かな けだしかれら なんじてん かたぶ くだ もの 如何なる 尊榮、如何なる 讃揚 か 聖人 に 適 へる、 蓋 彼等は 爾 天を 傾 けて降りし者の ため そのこうべ つるぎ した かたぶ なんじおのれ ひく ぼく かたち う もの ため そのち 爲に、其 首 を 劍 の下に 傾 け、 爾 己 を卑くして僕の 形 を受けし者の爲に、其血 そそ なんじ ひんきゅう なら へりくだ し いた かみ かれら きとう よ なんじを 選ぎ、 爾 の 貧窮 に 效 ひて、 謙 りて死に至れり。神よ、彼等の祈祷に因りて、 爾 じれん おお もっ われら あわれ たま の慈憐の多きを以て我等を 憐 み給へ。

嗣ぎて左の讃頌 聖イオシフ師の作、第二の調。

aが なんじ みみ わ いのり こえ き い 句) 願はくは爾の耳は我が祷の聲を聽き納れん。

かみ じっけんしゃ しとら じっ むけい ひ なんじら ひか いなづま ごと 神の 實見者 たる使徒等よ、實に無形の日たるイイススは 爾等 を 光れ る 電 の 若く、 ぜんせかい つかわ なんじら しんせい でんきょう こうみょう やみ いざない しりぞ むち 全世界 に 遣し て、 爾等 の 神聖 なる 傳教 の 光明 にて 暗の 誘 を 退 け、無知の くらやみ ふか かこ もの てら われら こうしょう おおい あわれみ くだ かれ 幽暗 に深く園まれたる者を照せり。我等にも 光照 と 大 なる 憐 とを降さんことを彼

<sup>1</sup> 自調(イディオメラ)というのは「替え歌」として用いることのできない独自のメロディ・パターンの意味なので、誦経の場合、無視して問題ない。

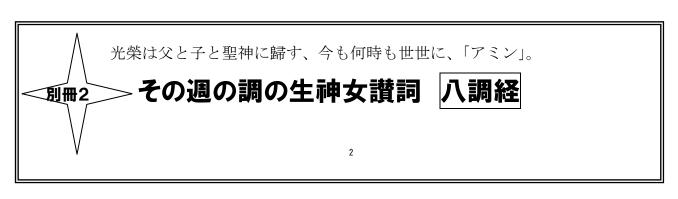
に祈り給へ。

つ。 も なんじふほう ただ しゅ たれ よ た しか なんじ ゆるし ひと 主 よ、若し 爾 不法を糾さば、主 よ、孰 か能く立たん。然れども 爾 に 赦 あり、人 なんじ まえ つつし ため の 爾 の前に 敬ま ん 爲 なり。

他のスティヒラ、聖フェオドルの作、第五の調。

 $\frac{1}{2}$  われしゅ のぞ か たましいしゅ のぞ われかれ ことば たの 句) 我主を望み、我が 靈 主を望み、我彼の言を恃む。

しんせい しとら せかい ため いた ねっしん きとうしゃ せいきょう もの しゅごしゃ われらなんじ神聖 なる使徒等、世界の為に至りて 熱心 なる祈祷者、 正教 の者の守護者よ、我等 爾もっともとうと もの もと われら かみ まえ ゆうかん ちから たも われら ため いの最 尊 き者に求む、ハリストス我等の神の前に 勇敢 なる 力 を有ちて、我等の為に祈り給へ、我等が 齋 の好き期を安らかに送りて、一性なる 三者の 恩寵 を受けん為なり。 尊榮 なる大 傳道 師よ、我等の 靈 の為に祈り給へ。



<→戻る、枠 P60 「聖にして福たる」>

17

<sup>&</sup>lt;sup>2</sup> 大斎第1週奉事式ではすべて1調で代用している。本来はその週、その曜日の生神女讃詞。または月課経のその日の生神女讃詞。

## 【ポロキメン】と旧約聖書の読み

輔祭 謹みて聴くべし

司祭 衆人に平安

輔祭

睿智、謹みて聴くべし しゅ なんじ われら たも われら まも こ よ えいえん いた 主よ 爾 は我等を保ち、我等を護りて、斯の世より 永遠 に至らん。 誦経



しゅ われ すく たま けだしぎじん た 主よ我を救ひ給へ、蓋義人は絶えたり。

えいち 司祭、睿智。

そうせいき よみ 誦経、創世記の讀。

っつし き 司祭、 謹 みて聽くべし。

誦経、

かみい ち いきもの そのるい したが かちく はうもの ち けもの そのるい したが さん神日へり、地は生物を其類に從ひて、家畜と、昆蟲と、地の獸とを其類に從ひて産 すなわちか な かみ ち けもの そのるい したが かちく そのるい したが ち すべし。 即 斯く成れり。神は地の 獣 を其 類に 從 ひて、家畜を其 類に 從 ひて、地の もろもろ はうもの そのるい したが つく かみこれ み よし かみい ひと われら ぞう 諸 の 昆蟲 を其類に 從 ひて造れり。神之を觀て善とせり。神日へり、人を我等の像 われら しょう したが つく かれ うみ うお そら とり けもの かちく ぜんちと、我等の 肖 とに 從 ひて造るべし、彼は海の魚と、天空の鳥と、 獸 と、家畜と、全地 ち は ところ もろもろ はうもの つかさど かみすなわちおのれ ぞう したが ひと つくと、地に匍ふ 所 の 諸 の 昆蟲 とを 宰 るべし。神 乃 己 の像に 從 ひて人を造り、 かみ ぞう したが これ つく これ なんにょ つく かみかれら しゅく い う ふ ふ 神の像に 從 ひて之を造れり、之を男女に造れり。神彼等を祝して曰へり、生めよ、殖 ち み これ おさ またうみ うお けもの そら とり もろもろ かちく ぜんちえよ、地に充てよ、之を治めよ、又海の魚と 獸 と、天空の鳥と、 諸 の家畜と、全地と、 ち は ところ もろもろ はうもの つかさど かみまたい み われなんじら ぜんち おもて あ 地に葡ふ 所 の 諸 の 昆蟲 とを 宰 れ。神 又日へり、視よ、我 爾等 に、全地の 面 に在

ta ま ことごと くさ およ ま ta いだ み むす ところ ことごと き ぁtc る種を蒔く 悉 くの草、及び蒔くべき核を懐く實を結ぶ 所 の 悉 くの樹を與へたり、 はうもの およ いのち もの われしょく すべ あお くさ あた すなわちか なの 昆蟲 、凡そ 生命ある者には、我 食 として 凡て の青き草を 與へたり。 即 斯く成れ かみ そのつく ことごと もの み はなはだよ ゆう あさ こ だいろくじつり。神は其造りし 悉 くの物を觀て 甚 善しとせり。夕あり、朝あり、是れ 第六日 な だいしちじつ そのつく ことごと わざ やす かみ だいしちじつ しゅく これ せい 第七日 に其造りたる 悉 くのエより息めり。神は第七日を祝して、之を聖にせり、 けだしこ みみ おい かみ つく そのことごと わざ やす 蓋 斯の耳に於て神は造りたる其 悉 くの工より息めり。

っっし 謹 みて聽くべし。 輔祭

ポロキメン 提綱、 誦經



(句) 主よ、我を全く忘るること 何の時に至るか、爾の面を我に隠すこと何の時に至るか。

めい 輔祭 命ぜよ。

兩手に香炉と火つけた燭台を取り、宝座の前に立ち、東に向かって十字を描いて、 司祭 睿智、 肅 みて立て。

(それから西に向き直って、会衆に向かって) ひかり しゅうじん てら ハリストスの 光 は 衆人 を照す。 司祭 (このとき会衆は伏拝する。)3

司祭、睿智。

しんげん よみ **箴言 の 讀**。 二章一至二十二節

謹みて聽くべし。 司祭、

誦経、

っ こ なんじも ゎ ことば い ゎ いましめ おのれ うち おさ か なんじ みみ ちえ 我が子よ、爾若し我が言を納れ、我が誠命を己の衷に藏め、斯くして爾の耳を智慧

<sup>3</sup> エルサレムの聖墳墓教会の受難週に灯りを取る儀式から始まったと言われる。

かたぶ なんじ こころ さとり む も ちしき よ さとり むか こえ あ も ぎん ごとに 傾け、爾の心を聰明に向け、若し知識を呼び、聰明に向ひて聲を揚げ、若し銀の如 これ もと たから ごと これ たず すなわちなんじしゅ おそ おそれ さと かみ し ちしきく之を求め、寶の如く之を尋ねば、則 爾主を畏るる寅畏を暁り、神を知る知識を え けだししゅ ちぇ あた ちしき さとり そのくち い かれ ぎじん ため すくい そな 獲ん、 蓋 主は智慧を 與 へ、知識と聰明とは 其 口 より出づ、彼 は義人の 爲 に 救 を 備 ふ、 かれ なお ゆ もの ため たて かれ こうぎ みち たも そのせいじゃ みちすじ まも か彼は直く行く者の爲に盾なり、彼は公義の途を保ち、其 聖者の諸途を守る。是くの ごと なんじ こうぎ こうはん せいちょく いっさい よ みち さと ちぇ なんじ こころ い如くして爾は公義と公判と正直と一切の善き道とを曉らん。智慧爾の心に入り、 ちしきなんじ たましい たのし とき すなわちしりょ なんじ まも さとり なんじ たも こ なんじ知識爾の靈に娯からん時は、則思慮は爾を守り、聰明は爾を保たん、是れ爾 あ みち いつわり い ひと すく なお みち はな やみ みち ゆ もの あく を悪しき途より、虚偽を言ふ人より救ひ、直き途を離れて幽暗の路を行く者より、悪 すく ため なんじ いんぷ ことば もっ へつら おんな そのわか とき きょうどうしゃ す 救はんが爲、爾を淫婦より、言を以て諂ふ婦より、其少き時の 教導者 を棄て かみ やく わす もの すく ため けだしかれ いえ し ひ そのこみち しぼうしゃて、神の約を忘れたる者より救はんが爲なり、蓋彼の家は死に引き、其徑は死亡者 おもむ かれ い もの みなかえ またいのち みち のぼ ゆえ なんじぜんにん みち ゆ ぎじんに 趣 く、彼に入る者は皆歸らず、亦生命の途に上らず。故に爾善人の途を行き、義人 みちすじ したが けだしぎじん ち ぉ え むてん もの これ とどま しか あくにん ちの 諸途 に 循  $\wedge$ 、 蓋 義人は地に居るを得、無 玷 の 者 は 此 に 留 らん、然 れども 悪人 は地 <sup>ESEE</sup> もと もの これ ねたや より滅され、悖れる者は之より根絶されん。

<→枠へ戻る P60>